【特別講義要旨】（1990年10月24日）

人口問題と食糧問題

畑　井　義　隆
（明治学院大学教授）

人口問題とは，人口の急激な変化が引起す社会経済的問題であるが，その１つが型で食糧不足という人口問題である。また食糧問題は，食糧の需給不均衡の問題であるが，人口急増が原因で起こる食糧の需給不均衡（不足）は食糧問題でもあるが，同時にそれは人口問題でもある。マルサスが人口原理として説いた学説は，このような状態の現出を自然のままでは不可避と見たのである。

しかしマルサスの予言は，全ての国にあてはまったとは言いがたい。食糧の生産増加の速度が彼の予想した等差級数的増加と異なり，等比的に増加してきたからである。技術進歩を軽視したことになるわけだが，当時の状況下ではやむを得なかったであろう。ここでは日本と低開発国を中心に，マルサス的見地から現代と将来の問題を検討した結果を報告したい。

ところで世界あるいは低開発国の食糧消費は，人口爆発によって悪化してきたし，将来においても悪化が続くという見解が評論界には強い。しかしそのことが該当するのは精々中南部アフリカのみであるが，それすら将来には少し改善されてゆくものと思われる。低開発国全体としては，人口増加率が低減して土地生産性が向上して行くことになる。

FAO のスタッフである Alexandratos グループの予測によれば，1984年から2000年にかけて中南部アフリカでは，地域住民１人当りの農業生産が年率0.1ポイントで上昇するとある。ほとんど現状の劣悪な食糧栄養状態から脱却できないで21世紀に入ってしまう。この原因は，明らかなように高率な人口増加率が持続することにある。幸いにして農業生産は3.4%と通常の増加率水準が見込まれるので，今後の課題としては，何よりも高人口増加率の低減化が必要である。